
母 = ?

たなべ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

母???

【コード】

N9428D

【作者名】

たなべ

【あらすじ】

(自称)普通の中学生、五十嵐正義。だが、その母親は…。

母 = ?

(前書き)

感想・評価どんなことでも頂けたら嬉しいです。

母 = ?

「今日も疲れたな」
少し薄暗くなってきた夕方。学校が終わった俺は自宅に帰宅中だった。

そして、その角を曲がれば家は直ぐそこだ。
角を曲がる。

自宅が見えた。

が、少し違和感があった。

「ん？ 明かりが点いてる？」

明かりが点いていた。登校する時にちゃんと消した記憶があるのに。

という事は…。

「帰ってるのか？」

珍しい。定時に帰って来てるとは。

「ただいまー」

言いながらドアを開ける。

「お帰りなさい。正義まよし」

ソワツ…

声を聞いた瞬間全身に鳥肌がたった。

「…何年聞いても慣れねえな…」

どうやら既に『変身』しているようだ。

「はあっ…」

軽く溜め息を吐きつつ、居間に顔を出す。そして、そこには…。

「お帰り。正義」

母 = ?

可愛らしいエプロンを着て

優しい微笑みをうかべた

マツチヨなオツサンが。

「……………」

「正義？ どうしたの？」

あまりにも衝撃的な映像に硬直していると、声をかけられた。

「…あ、ああ。ただいま。親父」

「……………親父？」

はっ！？ しまった！ 今の親父には禁句タブーの単語を言ってしまった！

「い、いや、お、お母さま？ 今のはちょっとした間違いで…」

「問答…」

ギチギチツ…！

親父の腕が丸太の様に太くなる。

「ヒツ！？」

その光景に思わず悲鳴を上げてしまっ、俺。

いかん！ 逃げなければ！

と思っただが遅かった。

「…無用！」

歩いた様子も無いのに、瞬間に俺の目の前に移動する親父。

あんた本当に人間かつ！？ とツツコミたくなるが、そんな暇は

存在しなかった。

「ママ・ザ・真拳！ 第一の奥義！ 『お母さまとお呼び！』」

ドコツ…！！

謎の叫びとともに、俺の顎あごに下から拳が叩き込まれる。

母 = ?

「ゲハアッ！！」

俺の体は錐揉み状に回転しながら上昇、

ゴッ！

天井に頭をぶつけ、落下、

ドスンッ！！

そして、床へと叩き付けられた。

「グゲツ…」

常人ならば無事では済まないだろうが、小学生の時から『愛の鞭』と称され今の攻撃を受け続けてきた俺は、全身が酷く痛むだけで済む。

（自称）常識人の俺としては、ぶっちゃけ嬉しくも何とも無い。が、小学生時代を考えれば喜ぶべきなんだろう。

…あまり思い出したくないな。うん。

…肉体だけでなく精神的にもダメージを受け、暫くの間「マッチョ怖い、マッチョ怖い、マッチョ怖い…」と呟き続けたなんて…。

…考えてみれば、よくグレなかつたな俺。自分で自分を褒めてやりたい。

などと過去を振り返っている間に体から痛みが引いてきた。

…俺も親父程ではないが、人間離れしてきてるな。将来どうなるのか心配になってきた。

「ママのことを親父だなんて！ 悪い子ね！めっ！よ」

と、親父がプリプリ怒りながら言う。その姿は驚く程に気持ち悪い。

…というか。

「呼び方間違えたぐらいで殴るなよ！」

母 = ?

ガバツ、と立ち上がりながら俺は叫んだ。

「黙らっしやい！ 悪い子におしおきするのも母の勤めです！」

「おしおきで息子を殴り飛ばす母親がどこに居んだよ！」

と、俺が言うと、親父はシュビツ、と音をたてながら親指で自分を指差し、

「ここに居るわ！」

と、言い放ちやがった。

「アホかー！ー！ーっ！！」

……。

……。

……。

さて、そろそろ色々と説明しようと思う。まず最初に、一番気になるであろう、己の^{おのれ}ことを母と吐^ぬかすマッチョなオッサンについて。

名前は五十嵐^{いごらし} 哲司^{てつじ}。名実ともに俺の父親だ。

無論、性別は男だ。

もう一度言うが、O・T・O・K・Oだ。

更にもう一回言うと、漢^{お・と・お}だ。

しつこい様だが、もう一回言うと、^{お・と・お}だ。

断じて女ではない。ましてや、オカマでもない。なら、何故己を母と言うのか？ それを説明するには、10年前のことを話さないといけない。

10年前、俺がまだ幼稚園児の頃の話だ。その頃は、親父も今の様な真似はしていなかった。俺の本当の母さん、五十嵐^{いごらし} 君子^{きみこ}と3人で暮らしていた。

だが、ある日、母が事故で亡くなった。

突然の出来事に、親父も俺も、深く悲しんだ。だが、親父にはまだ幼稚園児の俺がいたため、ずっと塞ぎ込んでいる訳にはいかなかった。

「自分一人でも立派に息子を育てなければ！」と意気込み、これか

らどうするかを考え始めたそうさ。

…と、ここまででは、いい話なのだが。その後、親父がどうしたのかが問題だった。親父曰く「やはり子供には母親が必要だ」と考えてはいたが、同時に「亡き妻を今でも愛しているから、再婚は出来ない」とも、考えていたそうさ。

そして、親父がいきついた答えは…

「ならば、自分が母親にもなれば良い!!」

……………そして、現在に至る。

……………うん。アホ過ぎて物も言えない。というか、母親にもなるって無理があるだろ。

…そんな訳で、親父は仕事に行っている時は素のままだが、自宅に居る時は大抵の場合『母親』に『変身』して過ごしているのだ。

そして、先程の様に、『親父』や、もしくはそれに類似する単語を言うと怒る。

どうやら、『母親』でいるうちはそう呼ばれるのが耐え難いらしい。

迷惑なことだ。

そのアホな親父の姿を見慣れている俺が何故、今日は思いつき驚いてしまったのかというと…。

「お…袋！ その格好はなんだよ！」

危ねえ…また親父と言ってしまうところだった。

「あら？ 何か変？」

と自分の体を見下ろしながら言う。

親父からすれば変な所なんて無いんだろう。

だが…！

「そのエプロンは何だよ!？」

そう。問題は親父が身に着けているエプロンだった。

色はピンク。

フリルがいたる所に付けられた可愛らしいデザイン。
確かに女性が着れば可愛いかもしれない。

…だが、それをマツチヨなオッサンが身に着けているのを想像して欲しい。恐らく、暫くの間吐気が湧いてくると思う。

…いや、冗談じゃなく本気で。

そういう訳で、俺は帰って来た時に、親父の姿を見て硬直してしまっただ。

…だって本当に気持ち悪いし。

「あ、これ？ 新しく買ったのよ。似合うかしら？」

「似合わない」

即答した。

こんな格好の親父はキモイ以外の何物でもない。

「まあ！ レデイに何て事言うのかしら！」

レデイじゃねえだろ！ と心の中で突込む。声に出したら何をされるか分からない。

「…とにかく、似合っていない」

「非道いわ！ 正義が喜ぶと思って買ったのに！」

「喜ぶ訳ねえだろ！ 何考えてんだあんた！」

今度は耐えきれず声に出した。

このオッサンは自分が女装すれば俺が喜ぶとも思ってるのか…！？

「オッサンがそんな格好して嬉しい筈あるか！」

「…………… オッサン？」

ぬおっ！？ しまった！？ つい本音が！

…ええい！ ままよ！

「オッサンにオッサンって言って何が悪い！」

…覚悟はいい？ 正義」

「それはこっちの台詞だ！ クソ親父！」

そう言いつつ、ファイティングポーズをとる。

そんなエプロンを着続けることを許可してたまるか…！

「…悪い子には躰しんが必要ね」

ミチミチミチツ…！

親父の全身の筋肉が膨張する。

…かなり怖い。軽く逃げ出したい…。

「う、うりゃああああっ…！」

闘志が萎えないうちに、叫びながら特攻する。

この一撃に全てをっ…！

くたばれ！ 親父…っ…！

……………。

……………。

……………。

…。

「ぐううっ…」

…無理でした。

…2秒で敗北しました。

…現在、地べたに這いつくばってます。

「やれやれ、反抗期かしらね…」

溜め息を吐きながら、無傷の親父が言う。

「ううっ…ぢぐじょう」 半泣きで呟く。

かなり悔しい…！ あんな変人のオッサンに負けるなんて…！

「そこで少し反省してなさい」

最後にもう一度溜め息を吐き、親父は台所に行った。

「ううっ…！ なんやのあれ！？ あんなん存在自体が反則とちや

うの…！？」

半泣きから本泣きにシフトしそうな勢いで呟く。

何故か関西弁（？）になっているのはそれ程悔しい、というあら

われだ…と思う。

自分でもよく分かん。

母 = ?

と、親父への恨み言を呟いているうちに、身体から痛みが引いてきた。

「…この回復力に感謝すべきか」
ムクツ、と立ち上がる。

「これなら…」

そう、これなら…。

「今すぐリベンジ出来る！」

俺の辞書に敗北の二文字はねえっ！

「ここまでコケにされて黙ってられるか！」

レッツ！ リベンジ！

「親父ーっ！！ 覚悟ーっ！！」

……………。

…その日一人の少年が宙を舞ったとかなんとか。

母 = ?

(後書き)

感想・評価お待ちしております！

母 = ?

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9428d/>

母 = ?

2009年3月24日12時08分発行